

かった。

思えば、長い年月をソ連軍は不法にも抑留という手段で我々罪のない人を捕え、不当な労役をしいた。

シベリアの炭鉱労働

長野県 春日直喜

昭和十九年一月十日、現役兵として高崎の歩兵連隊に入隊。数日後、北支派遣軍となり、釜山を経て北京に行き、ここで本科教育を受け、検閲終了後、大隊無線に配属となり四カ月間の通信教育を受ける。終了後、関東軍に編入され、黒龍江に近いクイロという所に駐屯し、ここに陣地を造り、ソ連軍と交戦すべくタコツボを掘り爆薬を準備し交戦を待つ。我々通信隊は通信のほか、ソ連軍の情報傍受等の任につく。

その後、戦局急変により奉天に移動し奉天守護の任務につく。着任後間もなく終戦となる。

やがてソ連軍が進駐し、武装を解除される。自動小

銃を持ったソ連兵の監視の中で空白の日々が二カ月近く続く。十月十日、ソ連軍より指令が出て列車に乗る。小さな貨車に二段に詰められ荷物のようだ。日本へ帰るんだ、我慢しなければと十日余り、突然「日本海が見えたぞ」の声、それは意外にもバイカル湖だった。バイカル湖を出てイルクーツクに着く。全員整列し服装検査、余分な物は一切その場に置き、旧ドイツ兵の捕虜収容所だったと言う半地下式のバラックに収容される。

間もなく炭鉱の重労働に駆り出される。作業は、ハッパで砕いた石炭を悪い物を除いてベルトコンベアーによりトロッコに積み込む作業である。一昼夜三交代の八時間労働。零下四〇度を超す寒さの中、鼻、手足の指先が白く凍る。そのままおいたら大変なことになる。お互いに擦り合いながら頑張る。作業終了後帰るため整列したところ、一人足りない。皆で捜したところ、後方に倒れているのがわかる。早速抱き起こしてみると既に息絶えて冷たくなり、手足は凍っているといった悲惨なこともあった。食糧は少なく、食事らしい食

事もない上の重労働、加えて厳しい寒さ、栄養失調により無念にも斃れる者が続出する。

死体は素っ裸にされ小屋に積まれ、凍りついて丸太のようになっている。つらいのは埋葬の使役だった。元日本軍の輜重車両に数人を積み、挽いて行って埋めるのだが、上は凍っていてなかなか掘れない。仕方なく雪を掛け手を合わせて帰る。自分もいつかはこうなるのかと思えば、心細くなる。

一日の作業を終え宿舎に戻る。石炭ストーブはあるが石炭の質が悪く、少ない。作業場から隠して持ち帰るが、検査がきびしく思うようにはいかない。朝方ともなれば寒さが身にしみる。こんなときは水筒の水を温めておき、腹の上に抱きかかえ、じっと耐えたこともしばしば。人間の生活とは思えないような日々が続く。

そのうちに身体検査が行われ、尻をつまんだだけの検査で一級、二級と分け、一級は一般労働、二級は軽作業、特に弱っている者は休養といった具合に区別される。どんなに体の調子が悪いと言っても、高熱がな

い限り休めない。

やがて春になり草木の芽の出るころになると、アカザを採って岩塩を入れたスープをすすりながら故郷の話などするのが一番の楽しみだった。

昭和二十二年の春になり、突然何か分からないが高熱が出て休養組に入る。一カ月くらいたったとき、急に日本に帰すと言われ列車に乗る。途中も半信半疑でいたが、いよいよナホトカに着き、海が見える。間違いない日本海だ。これで日本へ帰れると喜んでいたら、新青年連盟と言う連中が来て「お前たちはまだ民主教育が成っていない。これから徹底的に仕込んでやる」と言われ、第二収容所と言う施設に入れられる。

それから二カ月間、作業の行き帰りには赤旗の歌や労働者の歌を声張り上げて歌い、また夜の集会には彼らに同調し、スターリン、ソ連をたたえる。時には大きな声で「我々も日本に帰ったら同志と共に先頭に立って民主日本を築くのだ」と叫ぶ。皆で「オー」と同調する（陰では日本に帰るため仕方ないと言いがら）。こんなことが認められてようやく復員船に乗ることが

できる。長い長い二年間の抑留生活に終止符を打つことができた。

シベリア抑留記

京都府 林 至

生年月日 大正十五年二月二十七日

現住所 京都府船井郡丹波町字院内小字市庭十一番

地の一

元陸軍二等兵

満州黒龍江省白城県大仙義勇隊開拓団より昭和二十年七月十五日召集される。通化工兵隊へ入隊。当時は独身。初年兵訓練を受けながら山岳地に陣地構築をする。ソ連軍が先端を切って国境線を突破した場合は通化を第二の拠点として防衛する計画だと聞いた。

八月十五日、終戦の詔勅を部隊のラジオで聴いた。応召してまだ一カ月、張りつめていた緊張が音をたてて崩れるようガククリとした気持ちになった。

武装解除は十月中旬ごろであった。

昭和二十年十月中旬、黒河からソ連領ブラゴエシチェンスクへ黒龍江を渡る。抑留されたところは、ここより約一千八百キロ西方に世界有数のバイカル湖があり、その西にあるイルクーツクという州都が拠点であった。収容所はこの街から自動車で五十分余りのところであり、以前ドイツ兵捕虜を収容していた粗末な建物へ我々はいれられた。狭い部屋でゆっくり足も伸ばせない。それから二年間、場所や労務は変わっても昼夜ソ連兵の監視のもとに労働を強制されることになった。この収容所に入れられたのは三個小隊、合計三百人ほどであった。

労務はその日によって、いろいろ変わることがあるが、主として煉瓦製造工場の雑役である。大型の運搬車に原料の土砂をスコップで積み込む者、積み終わった運搬車を工場の中へ押して行く者。一台に積み終わっても次の空車が待っている。休む間もない。汗が目にしみる。シベリアの夏は身が焼けるように暑い。食事の量が少ないので終日空腹だった。朝食は青いトマト